はじめに

一枚の写真が時代を変えた、というのはよく聞く話だ。

たとえば、ある写真は戦争の悲惨さと不毛さを伝え、ある写真は環境破壊の現実を白日のもとにさらし、また別のある写真は、宇宙空間に浮かぶ地球の美しさと小ささを描き出す。

歴史の教科書の「現代」を彩るそうした写真が、けれども最近、二〇世紀の遺物のように感じられてならないのは、どういうわけだろう。

フィルムがデジタルになり、紙の雑誌がウェブページになり、カメラがスマホの一部となってしまった結果として、写真と私たちの関係性は、よく言えば親密になり、悪く言えば節操のないものになってしまった。

事実、メディアの話題となる「一枚の写真」は、匿名の誰かが出来心で撮ったイタズラ写真や、さほど手が込んでいるとも思えないフェイク画像が大半を占め、しかもそれらは、

ときに企業の株価を下落させ、著名人の名誉を汚し、ともすれば私たち自身の明日を奪いかねないほどの力を持つに至っている。

そんな「今」を憂うとき、闇雲に同時代の評論に手を伸ばしてみても、納得のいく答えはなかなか得られない。ネット上での画像の拡散といった現象一つにしても、送信者たちの常識のなさを非難するものがあるかと思えば、受信者たちのネット・リテラシーの低さをことさらに責め立てるものもあり、結局のところ、教えを乞おうとしている私たちにこそ非があるかのような言葉ばかりを投げつけられて、心の底からうんざりしてしまう……。

だが、そんな「今」だからこそ、私たちは思い出さなければならない。私たちにはかつて、スーザン・ソンタグという信頼に足る批評家がいて、たとえばその『写真論』と題された本をめくったならば、今まさに問題となっている写真と人間の「節操のない関係」など、半世紀ほども前の段階で、その本質のほとんどすべてが語り尽くされていたということを。

同じことは、感染症の流行やヨーロッパを舞台とした戦闘、あるいは、セクシュアルマイノリティの文化理解やネオナチ問題への向き合い方などにも当てはまる。『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』、『サラエボで、ゴドーを待ちながら』、『反解釈』、『土星の徴(しるし)

しの下に』など、いずれも良質な日本語で訳されてもいるソンタグの著作には、それこそ「不安」が節操をなくして拡散し続ける現代社会をどう読むべきなのか、その知的方法論が、確かにはっきりと書き込まれていたのである。

*

しかし、現代日本において、ソンタグはまだ「再発見」を待っている段階だ。

だから、もう少しだけ詳しく、ソンタグのことを説明しておこう。

まず、スーザン・ソンタグ（一九三三―二〇〇四）とは、現代アメリカを代表する知識人の一人である。

彼女は、写真や映画といった映像文化に造詣が深く、ジェンダーやセクシュアリティの問題にも敏感で、かつまた結核やがんといった病のイメージについても熱心な議論をし、そしてベトナム戦争以後、9・11に至るまでずっと社会問題に反応し政治的な発言を続けた人だった。

では、そんなソンタグの肩書きとは、いったい何か？

本書では、その仕事の比重から「批評家」という肩書きを採用したいと思うのだが、本人としては「作家」あるいは「物書き」であるということが重要だったのかもしれない。というのも、晩年のソンタグは、小説の執筆に多くの時間を割いていたし、活字でのデビューも、批評家より小説家としての方が早かったからである。

ただ、この他にも、「評論家」「映画監督」「活動家」などの肩書きをもつソンタグは、ともすれば「マルチな才能をもった文化人」という大ざっぱなくくりで理解されがちだ。しかし、そのような紹介をしてしまうと、「現代アメリカを代表する知識人」という一般的な認識とも齟齬をきたしてしまうから、やはり肩書きというのは難しい。

実のところ、ソンタグのような偉人は、（いそうでいて）そうはいない。

もちろん、ソンタグと同じくらい優秀な学歴をもち、ソンタグと同じくらい刺激的な文章を書き、そして、ソンタグと同じくらいメディアに注目された知識人は、今も昔も存在する。けれど、ソンタグのように自身の輝かしい学歴に背を向け、刺激的な内容を絶妙な文章に磨き上げ、そして、メディアを利用しても決してメディアに踊らされることのなかった人というのはとても珍しいのだ。

そんなソンタグが亡くなったのが二〇〇四年。

当時は、日本でもかなりの人たちが、ソンタグの名前を口にしていたはずだが、あれから二〇年近くが過ぎようとしている今、世界的な再評価の高まりとは裏腹に、日本ではその名を耳にすることが減ってきたように思われるのはなぜか。

思うに、ソンタグが背負ってきた一九六〇年代的なアメリカの「カッコよさ」（それはたとえば、大人たちが主導する文化をひっくり返すために、若者たちのバカ騒ぎの中に新しい価値観を見出すといったたぐいの「カッコよさ」だ）が、今の日本ではあまり魅力的ではなくなってしまったということも理由の一つかもしれない。

あるいはまた、かつての若者文化がすでに賞味期限を迎えていることを宣言したり、がんやエイズのような難病治療にとって文学的表現は邪魔以外の何ものでもないことを告発したり、さらには、善悪の決めつけができないような紛争や戦争やテロに対してあえて一般的な感情を逆撫でするような政治的立場を表明してみせたりといった、一九七〇年代以降のソンタグが体現してきたもう一つの「カッコよさ」も、今の日本では流行らないからかもしれない。

とはいうものの、そうした傾向はあくまでも、「今の日本では」ということに過ぎない。類い稀なる知性と文才をもって生まれたソンタグ自身の、若者から成熟した大人へと変

わる精神的成長の記録とでもいうべき著作群は、その読み方さえ理解することができれば、混迷を深めていくばかりの世界と対峙しなければならない私たちにとって、明日を生き抜くための最高のツールとなるはずなのだ。

*

最後に、本書のサブタイトルについても説明しておきたい。

ソンタグの仕事を再評価する上で最も注目すべきは、「脆さ」＝「ヴァルネラビリティ」に対する彼女の思想であろう。

今日、ヴァルネラビリティという概念は、福祉・介護の現場における人権や支援のあり方を考える上でも欠かせないし、自己啓発書などではしばしば、相手の信頼を得るためにみずからのヴァルネラビリティをさらけ出すことが推奨されたりもする。だが、私たち人間一人ひとりの抱える「脆さ」というものが、実は冒頭にも言及した、写真と人間の節操のない関係性にこそ見出されると聞いたら、あなたはきっと驚くはずだ。

そう、写真論を筆頭とするソンタグの文化批評は、その中心にいつでも「脆さ」につい

ての思想があり、その着想と実践は、今の私たちにとっても十二分に斬新なのである。

ただし、本書では正確を期して、これを「脆さ」にあらがう思想と表現したい。その理由は、ソンタグが一貫して「反解釈」の人であったからだ。

AはBであるという一方的で権力的な解釈行為にあらがうソンタグは、いわゆる「逆張り」と呼ばれるような主張をしていると誤解されがちだが、それは違う。本書で詳しく見ていくように、ソンタグにとっての「あらがい」とは、みずからの知的対象物に対する慎重さの表明でもあるのだ。

「脆さとは○○である」という安易な解釈に対し、ソンタグは徹底してあらがってみせる。もちろん、緻密さと大胆さが存分に発揮された彼女の文章は、いかなることがあろうと、私たちの「脆さ」そのものを否定するようなことはしない。

本書を通じて、ソンタグの挑発する知性とあらがいの思想が、厳しくも慈愛に満ちたものであることに気づいていただければ幸いである。

目次

はじめに 3

第1章 誰がソンタグを叩くのか 18

知性とバッシング
知識人ソンタグの履歴
意見製造機への苛立ち
生身の人間としてのテロリスト
伝説の舞台裏へ

第2章 「キャンプ」と利己的な批評家 27

脆さと苦痛を考える

カッコいい、だから叩かれる
ヒップな文化の「やんちゃな甥っ子」
「カッコ悪い」から「カッコいい」を発見する感性
教科書化するキャンプ
キャンプを裏切る
「反」＝「アゲインスト」は利己的である

第3章　ソンタグの生涯はどのように語られるべきか

これからのソンタグの話をしよう
ドキュメンタリー番組「スーザン・ソンタグの生涯」
評価を二分するソンタグ像
「才女」とは誰か？
ソンタグのアフォリズム

第4章　暴かれるソンタグの過去 —— 67
漱石を読むソンタグ
翻訳としての解釈
ソンタグのなかのヴァルネラブルな子ども
他者の「脆さ」に関与すること
（不）誠実な鑑賞者

第5章　『写真論』とヴァルネラビリティ —— 81
写真にあらがう
惨劇と絶滅を撮ること
プラトンの洞窟で
批評家ソンタグの「暗順応」
ダイアン・アーバスの暗いアメリカ

第6章　意志の強さとファシストの美学 —— 96

「意志」の両義性
『意志の勝利』を断罪する
ファシストの美学
三島由紀夫とバタイユの美学
大真面目なことを大真面目に

第7章　反隠喩は言葉狩りだったのか —— 118

ヴァルネラビリティを安易に語らないための準備
隠喩のコレクション
大江健三郎に向けた「反隠喩」
利己と利他と9・11
ソンタグの二重のフラストレーション

第8章　ソンタグの肖像と履歴 —— 140
『人間失格』とベンヤミンの写真
「女性」が被写体になるとき
「夫」フィリップ・リーフとの生活
研究者としてのキャリア
「強さ」の解釈にあらがう

第9章　「ソンタグの苦痛」へのまなざし —— 162
ある写真家の人生
ソンタグの一人芝居？
ハラスメント疑惑と隠喩
息子デイヴィッドの「ケアラーの経験」
反隠喩、ふたたび

第10章　故人のセクシュアリティとは何か　177
追悼文への苦言
「大きなお世話ですよ！」
「好色」という隠喩
鑑賞者の側のセクシュアリティ
誰かを愛する、とはどういうことか

第11章　ソンタグの誕生　191
『仮面の告白』と「訪中計画」
ギャツビーを語るニックの「反批評」
過去の中に予見された未来
自殺した「もう一人のスーザン」
未来の苦痛は誰のもの？

終　章　脆さへの思想 ―― 209
批評家としての覚悟
反知性主義的な知性の闘い
テクノロジーの恩恵にあらがう
ヴァルネラブルであること
盾としての批評
おわりに ―― 220
註 ―― 224
図版レイアウト／MOTHER